

はじめに

情報や経済のグローバル化が進む中、莫大な利益を享受する人々が存在する一方で、その恩恵を受けることなく、最低レベルの生活さえもままならない貧困層の人々が存在する。その中でも最大の犠牲者は子どもたちであり、その多くが家計を支えるために労働に従事するか、病気や飢えにひたすら耐え忍ばなければならない状況にある。彼らは、好むと好まないに関わらず、置かれた状況や知識不足によって、ほんの限られた選択肢にしかアクセス出来ないのである。アマルティア・センによれば、それは単に所得が低いという経済的な意味での貧困のみならず、あらゆる機能の集合体にアクセスする選択の自由が剥奪された状態という意味での貧困であるという。こうした考えに基づき、本研究では貧困の定義を、「置かれた状況と知識不足から来る選択肢の欠如」とする。

では、この貧困状況に対して、教育はどのような役割を果たすのだろうか。そもそも、教育の本来の意味、あるべき姿とはどのようなものであろうか。英語の **education** やフランス語の **éducation** は、元々ラテン語の **educō** に語源を持つと言われており、その語の **e** は「out (〜から)」、**duco** は「lead (導く)」「draw (引く)」の意味を持つ。ドイツ語では、教育を **erziehung**(**ziehen** の名詞化)と言い、**er** は「内から外へ」という意味を持ち、**ziehen** は「引く」を意味する。ここに共通して見られる教育の本来の意味は、「人の内側に潜んでいるものを外側へ引き出す」ということである。16世紀ルネッサンス期においては、**education** は、学校における知恵の伝達行為としての **instruction** とは対立する言葉として位置づけられ、子どもの能力を引き出し大人が子どもを養い育てるという意味で用いられた。しかし、17世紀になると次第にその区別は無くなり、18世紀には、学校で、共同体の風習と関係のない知恵を伝授する行為こそが、教育であると考えられるようになった。こうして、教育は、「内から外へ」導き出すという行為から、大人の知識を子どもに伝授するという「外から内へ」教え込む行為へと変換していった。すなわち、権力を主とした統制の教育行為として、現代の教育観は形成されていったのである。

この「外から内へ」教え込む教育概念は、ロックの思想にも通ずるもので、彼は子どもを、空っぽの「箱」と考え、教育とはその箱に大人が持っている知識を入れ込む作業であるとした。パウロ・フレイレによれば、この「外から内へ」一方的に話しかける教育行為は、非人間を形成する教育に他ならないという。彼は「銀行型教育概念」という言葉を使い、知識がまるで貯金のように大人から子どもへ流れ、子どもはそれを単に貯蓄するのみの教育は、抑圧的なイデオロギーを助長し、想像力、批判的思考力の形成を妨げるとした。

このように、教育は時代と共にその意味を変化させてきたことを踏まえ、もう一度 **education** の本来の意味に立ち返った上で、貧困との関わりを考えていきたいと思う。そこで、本研究では、様々な国の事例を取り上げ、国際レベル、国家レベル、草の根レベルにおける教育が、「人の内側にある潜在性を引き出す」という本来の **education** の意味で行われているのか、そして、それが選択肢の欠如した貧困状態に対してどのように関わっているのかということをも明らかにしていく。これが、本研究の目的である。アプローチとしては、まず、各事例に関して、選択肢が欠如した貧困状態を明確にした上で、それに対してどのような教育、取り組みがなされているのかを示し、それが本来の **education** の意味に基づくものであるのか、そしてそれが選択肢を拡大するものであるのかを考察していく。研究対象は、国際機関、ブラジル、アフリカ諸国、カンボジア、インド、日本である。この研究が、読者にとって、貧困と教育に対する考えを深める契機となれば幸いである。